

大学出版 '99 夏

No.42



大学と社会を結ぶ
知のネットワーク

The Association of
Japanese University Presses
大学出版部協会



読書の周辺 「人間通」の原敬 ▼ 玉井清 — 1

読書の周辺 ブリテイッシュ・ライブラリーの片隅で ▼ 澁谷浩 — 6

〈第三回 日・韓・中大学出版部協会合同セミナー〉

講演要旨 大学出版部の社会的役割 ▼ 高橋一夫 — 11

ネットワークがもたらす本と読書の環境変化 ▼ 植村八潮 — 13

歩く・見る・聞く 知のネットワーク15 — 17

大学出版部ニュース — 19

新刊案内 Contents — 28

製作の現場から20 — 表3

表紙イラスト「ヨースト・アマン 『職人図鑑』」より
 大学出版部協会マーク・デザイン「道吉 剛」

〈書籍の表示価格は税別です〉



大学出版部協会ウェブサイト
<http://www.ajup-net.com/>

「人間通」の原敬

玉井 清

一、「人間通」といふこと

原敬は、近代日本政治上、有力政党であった立憲政友会（以下、政友会と略す）の第三代総裁に就任するとともに、同党を率い大正中期中に、我が国最初の本格的政党内閣を成立させることに成功したことで知られている。しかも、原内閣は、原が暗殺されるまでの三年余に互り続き、明治憲法体制下の内閣の中では、歴代四位に位置する長期政権となった。

今春上梓した拙著『原敬と立憲政友会』（慶應義塾大学出版会、A5判、三九〇頁）は、その原が伊藤博文、西園寺公望の後を継ぎ、政友会の第三代総裁に就任してから、政権を獲得するまでの時期、すなわち大正期の第二次大隈重信内閣、寺内正毅内閣、原内閣の三内閣の時代を考察の対象とし、彼が政友会を率い政権を獲得するためいかなる戦略と戦術を展開したか、また獲得した政権を維持するため自党をいかに指導したか、いかなる施策を実行に移した

かを検証したものである。

右に述べたように原は、政治権力の頂点に登り詰めることになるが、そこに至るまでの道のりは順風満帆であったわけではない。とりわけ、政界及びその周囲には、政党勢力の影響力拡大に批判的な元老、軍部、官僚、貴族院、枢密院が割拠し、原の政権獲得に障害となることが予想された。原が、こうした障害を乗り越え政権を獲得し維持することができた理由は種々考えられるが、ここでは彼が優れて「人間通」であったことに焦点を当て、その理由の一端を明らかにしてみたい。

因みに「人間通」という言葉は、私淑している谷沢永一氏が、その著書の中で、あるいは著書の題名としてしばしば用いているものであるが、これを私なりに定義すると、次のように言うことができる。それは、人間の本性に通じ、人間の行動の深層に潜む動因を見抜く鋭い眼力を持っていること、また、その眼力を人間社会を生き抜く知恵として活用できる人物のことをいう。

原が、膨大な量と質を兼ね備え、明治から大正の政治史研究に必要不可欠な日記を書き残したことは、よく知られている。そこには、原自らの行動はもとより、彼の下を訪れた人物と、その人物がもたらした政界情報、さらにはそれらの情報に基づく彼の政界観測が克明に記されているが、その『原敬日記』を読むと、彼がいかに「人間通」であったかを看取することができる。ここでは、拙著の中で言及した原の非政党勢力への接し方を敷衍補足しながら、原がいかに「人間通」であったか、そしてそのことが非政党勢力の懐柔に、ひいては彼の政権獲得と維持にいかにか寄与したかについて紹介してみたい。

二、山県有朋への工作

原が政権を担当する前後の大正中期、元老山県有朋は、実質的なキャビネット・メーカーであり、軍部、貴族院、官僚などの非政党勢力に対し多大な影響力を持つ政治家であった。『原敬日記』を読むと、その山県が政友会を含む政党の勢力拡張を快く思わず、これを阻止するために種々工作を行っていたこと、さらに原がそのことをしつかり認識していたことがわかる。それゆえ原は、山県の言動に対し常に警戒を怠らず、たとえ山県が自分に対し好意的言動を示したとしても、絶えず猜疑の目をもってこれを受け止めていた。

しかし、原は、このように山県に対する不信と警戒の念

を内心強固に抱き続けながらも、山県との関係改善に努め積極的に接近していった。それは、原自ら山県の下に足を運ぶことにより、あるいは側近を山県の下に向かわせることにより、逆に原の下を訪れた山県の側近を活用することにより行われ、山県への情報伝達を欠かさず、意志疎通に努めたのである。さらに注目すべきことは、それが政権獲得前後を通じ一貫して行われていたことである。一般に権力者は、権力を獲得するまでは周囲に対する配慮とお世辞を欠かさぬものであるが、一度権力を握ると周囲が見えなくなりがちである。しかし、原はこの権力者の弊に陥ることとはなかった。「人間通」の原は、政権の座に就いた自分が、従前に増し反感や嫉妬の対象になることを、そしてそれこそが自分の政権を脅かす最も危険な因子になることを熟知していた。政権獲得前後における原の山県に対する接し方を見ると、そのことがわかる。

原内閣誕生を実質的にまた最終的に決定した山県と西園寺との会談の席上、西園寺は、山県に対し、原は政権獲得後も山県の支援を必要としているので、従前通り原への助言を続けてくれるよう懇請していた。一方、その会談直後に西園寺は原に対し、山県は今後も原の接近を望んでいるので山県の意見も聞くよう忠告していた。そして、原はこの西園寺の忠告を忠実に守り実行に移したのである。例えば、組閣に際しての陸相人事の相談及び組閣後の挨拶はもとより、パリ講和会議の全権委員の人選、帝国議会開会前

後を通じての政府の予算や内外政策の方針について、原は山県に相談している。もっとも、それらの殆どは、自分の内案を持ち山県のを承を得るためのものゆえ相談を仰ぐというより、政府の方針を情報として伝えることに重点が置かれていたといってもよい。しかし、その情報伝達こそ、多大な意味と意義があることを原は知悉していた。

政界に隠然たる影響力を持っていた山県ではあるが、当時既に八十歳を迎える高齢の身の上になっていて、健康上の問題もあり政界の表舞台からも次第に退きつつあった。

このように人生の終盤を迎え、日に日に孤独感を深めていたであろう山県の下に、政局の要所要所において政権担当者である原から相談を兼ねた情報が伝えられることは、山県の自負心を十分満足させたであろうことは想像に難くない。このことは、前政権の寺内正毅内閣末期、山県と寺内との間に生じたさざ波を見ると、理解がより容易になる。すなわち、寺内内閣末期、山県は寺内が、自分のところにあまり相談も報告もしなくなったことに対し不満を洩らしていた。同じ長州軍閥出身で自分の子飼いと考えていた寺内が、政権を握ると次第に距離を置くようになり不満を募らせていた山県にしてみれば、自分とは対極に位置すると考えていた政党党首の原が、政権獲得前はもとより、政権獲得後も変わらずに接近し自分との意志疎通に努める姿勢をとったことは、山県の原に対するより一層の歓心と呼び起こしたことは間違いないところである。これは、政治理

念や政策とは異なる次元の人間関係の機微に關することであるが、それが人間社会を動かす重要な鍵になることを、政治の世界も例外ではないことを原は知悉していた。

こうした原の「人間通」としての面目躍如たる側面は、山県以外の伊東巳代治や田健治郎に対する身の処し方からも看取することができる。以下、簡単に紹介してみたい。

三、伊東巳代治への工作

周知のように伊東巳代治は、伊藤博文の憲法調査の渡欧に随行したことからわかるように、明治憲法作成に際しては伊藤の側近として活躍し、井上毅、金子堅太郎とともに「三天王」と呼ばれたこともある人物であった。一八五七（安政四）年生まれの伊東は、三十歳になる前に既に政治権力の中枢に参与し、脚光を浴びる位置にいたのである。これに対し一八五六（安政三）年生まれの原は、伊東より一つ年上ではあるが、伊東が既に政治権力の中枢に参与していた明治憲法発布前後の時期は、新聞記者を経て官界に歩みを進めたばかりのころであり、外務省、農商務省において官僚生活を送っていた。すなわち、実質的な明治憲法作成者の側近として政治権力の中枢に参与していた伊東は、新聞記者上がりの一官僚として政治権力の外周に位置していた原を、その経歴においてはるかに凌いでいたといえる。しかし、その後、両者の立場は逆転することになる。すなわち原は、政友会の有力幹部から総裁になる一方、重量

級の閣僚である内相に三度も就任した後、首相の座に登り詰めたのである。正に権力の外周から時間を経るに従い中樞に接近し、自らそれを担うことになったのである。これに対し、伊東は、枢密顧問官等になり政界に影響力を保持し続けるものの、枢密院に政治を主導する権限や役割が与えられていたわけではなかった。伊東が権力の中樞から外周へと次第に離れていったのとは対照的に、原は権力の外周から中樞へと歩みを進め、両者の立場は逆転することになったのである。

このように政治権力の階段を登り自分をはるかに凌ぐ頂点のポストを射止めた原に対し、伊東が少なからぬ反感と嫉妬心を抱いていたであろうことは想像に難くないが、「人間通」である原は、このことを明確に自覚し、伊東への警戒と配慮を怠ることはなかった。

原内閣は発足当初、小選挙区制の導入を骨子とする選挙法改正を念願としていたが、衆議院議員選挙法は憲法付属の法律であったため、その改正のためには枢密院の賛同を得る必要があった。大正デモクラシーの気運が高揚していた当時において、枢密院の反対についてはそれほど懸念する必要はなかったかもしれないが、原は主要な枢密顧問官に出来る限り事前に了承を得る配慮を欠かさなかった。近來枢密院内で孤立がちであると見なしていた伊東に対して、思いがけぬことから反対の挙にでるかもしれないので、これを防ぐためにも事前に話を通しておくことが肝要と考

え、これを実行に移していた。原は、伊東との会談当日の日記に、伊東は事前相談を受けさえすれば満足すると考えていたが、実際その通りであったと記していた。そこには、伊東の面子を立てる配慮が、効果観面てきめんであったことに対する満足感が滲み出ている。伊東には山県ほどの影響力はなかったが、右に紹介したような従前の経歴から生じる伊東の原に対する嫉妬心には、特別の警戒と配慮を必要としたのである。

四、田健治郎への懐柔工作

前寺内正毅内閣の通相で山県閥の有力貴族院議員であった田健治郎への原の対し方にも、同様の配慮を伺うことができる。原は、政権発足の約一ヶ月後、田の為にわざわざ小宴を設けた。この席には、山県や田の側について情報伝達係を務めていた松本剛吉が招待されるとともに、政府与党側からは彼らに近い横田千之助も同席した。こうした出席者の顔ぶれを見れば、それが田との意志疎通を今後も積極的に進める原の意志表明であるとともに、田への協力要請を目的としていたことは明らかである。政治や経済についての話がかわされたこと以外に会談内容の詳細は不明であるが、ここにおいて重要なことは、政権の座に就いた原が、田のことを軽視せず早々に小宴を設け招待したこと、さらに田との意志疎通を積極的に行う姿勢を示したことである。それは、山県や伊東の場合と同様、田の自負心を十分くす

ぐり満足させたであろうことは想像に難くなく、以下紹介するように、その効果は貴族院だけでなく衆議院の政府案審議にも発揮されることになる。

例えば、田は、前出した選挙法改正案の成立過程の中で、衆議院貴族院の両方において、鍵を握る人物の一人であった。まず、衆議院において、原が率いる与党政友会は、第一党ではあったものの、過半数を占めてはいなかった。第二党に憲政会、第三党に立憲国民党と続いたが、両党は政府案に反対することが明らかであったため、法案通過のキャスティングボートを握っていたのは、無所属系議員であった。そして彼ら無所属系議員の少なからぬ者が、前内閣下の総選挙において田の世話になっていたのである。すなわち、前回総選挙に際し、政府の選挙対策責任者の一人であった田は、山県の三党鼎立の理想実現のため、政府系無所属候補の擁立を積極的に推進し、彼らに対し金銭援助を含めた支援を行う役割を担っていたのである。そうした経緯があるため、田は彼らの指南役的存在であり、実際、該改正案をめぐりいかなる態度を取るべきかについて相談を受けていた。これに対し田は、政府案に賛同するよう助言していたのである。

また、貴族院において、田は茶話会に所属する有力議員であった。拙著の中で紹介しているように政友会が貴族院の中で提携工作の対象としたのは、貴族院最大会派の研究會であり、同会の協力が原内閣の政権を安定させた。これ

に対して、勅撰議員が多く所属する茶話会は、保守的で反政党的色彩が強く原内閣に対して好意的とは言い難く、原内閣の直接の工作対象ではなかった。しかし、議会における採決結果をみると、茶話会は反原内閣で結束できず分裂傾向にあったことがわかる。同会の有力議員であった田は、時には病を押してまで登院し、政府案への協力を要請する説得活動を貴族院議員に対して行っていたが、茶話会が反原内閣で一枚岩になれなかった一因として、こうした田の説得工作を看過することはできないであろう。

以上のように、田は原内閣に対して好意的姿勢を示し続けたが、その契機として先の会談の持つ意味は大きかったのではないかと推断できるのである。山県、伊東に対するのと同様、「人間通」である原のかかる配慮が、非政党勢力の原内閣に対する反感を緩和させ、政権を揺さぶる行為を極力抑制させたといえる。

(慶應義塾大学法学部教授)

ブリティッシュ・ライブラリーの片隅で

澁谷 浩

知的好奇心に、そう欠けているとも思わないのだが、それにしても博物館と私の関係は密なものとはいえない。少年時代、明治維新関係の展示物を集めた小さな博物館に時折訪れたことがある。下関という土地柄だけに、維新と時代はずれるが、乃木大将ゆかりの遺品も陳列されていた。それが戦争中の私の少年期に接した唯一の博物館であった。何しろ、その地方にはそれしか博物館はなかったし、美術館に至っては皆無であった。そういう文化施設とのつきあいの薄い生活を大人になっても続けてきたのは、少年期の習慣によるのだろう。

私の住んでいた田舎町にも市立図書館はあった。ここには足繁く通った。終戦直後の殺伐とした時代にあつて、図書館こそが少年の世界を覗き観る望遠鏡であり、夢を養い育てる温室であった。図書館の建物の構造、係員の顔、椅子の坐り心地、そして新しい本を借り出した時の心踊る期待感が昨日のことにように思い出される。ただし私には帰巢本能が発達しているというのか、妙な癖があつて、図書

館の中では館外貸出し禁止の本は読むけれども、そうでない本は取替え引替え借り出しては家で読むのである。そうしないと読んだ気がしない。この点は大学に入っても卒業しても教師になっても変わらない。

*

ただし大学の教員になって間もなく、私の読書歴には大きな変化が起きた。修論を書く時から、私の専攻は一七世紀イングランドのピューリタン革命思想史と決めていた。

修論を書く段階では、現代になって出版された資料集で間に合わせたが、大学の学術雑誌に論文を発表するようになると、到底それでは済まされなくなる。ピューリタン革命期の一六四〇年代の急進派だったレヴェラーズ（こんな表記の仕方まで流行、廃りがあるもので、私が駆け出しの研究者だった時分は平等派とか水平派とか「訳して」表記したものだ）の指導者格の人物、ジョン・リルバーンを最初の対象とした。それは Pauline Gregg のリルバーンの

評伝Free Born Johnの巻末に彼の著作のビブリオグラフィがあり、それに収録された著作のほとんどにブリティッシュ・ミュージアム(B・M)図書館の書架番号が付けられているからである。私はB・Mに手紙を書いて蔵書のマイクロ・フィルムを依頼する方法を教わり、グレッグを参照しながら手当り次第フィルムを注文した。ある時、注文したフィルムがなかなか到着しないことがあった。正確な日数は忘れたが、とにかく通例の日数の倍になっても届かない。しびれを切らした私はB・Mの理事長ブリッジウォーター卿に宛てて催促状を書いた。この家名は何かで読んだことがある。何でも相当な旧家で、貴族の家柄らしい。新米の専任講師が、貴館の怠慢は小生の研究に多大な不便を与えている、とか何とか利いた風な文句を言える相手ではないのだ。しかし効果はてき面だった。私の手紙がロンドンに着いて間もなく発送したと思われるB・Mの小包を、私は間もなく受け取った。

グレッグの資料表の書架番号は、リルバーンの著作のほとんどがThomason Collectionに収録されていることを示す。トマソン・コレクションはB・M図書館所蔵の大コレクションの一つで、書籍商ジョージ・トマソンがビューリタン革命期のロンドンで出版された書籍・小冊子・新聞等二万二千余点を購入して作り上げた文庫である。グレッグの資料表には載っていない本まで手を延ばさねばならなくなっただので、トマソン・コレクション目録のリプリント

版を得てレヴェラーズ以外の著作者の著書をも注文した。その内、B・M図書館では増大するマイクロ・フィルム・コピーの仕事の繁雑さに耐えられなくなったのか、B・Mへのコピー注文はアメリカのユニヴァンシティー・マイクロフィルムという会社に発注する制度に切り換えられた。ところが、この会社に注文すると……いや、まあ余計な不平は言わないでおこう。

マイクロ・フィルムはマイクロ・リーダーで読むのが一番手取り早い。しかし、ある図書館でマイクロ・リーダーを使おうとして係員に注意されたことは、根を詰めて読んではいけません、三〇分読んだら五分休むくらいのつもりで読みなさい、そうしないと気分が悪くなりますよ、ということであつた。まったくその通りで、それがマイクロ・リーダーの第一の不便さである。第二に、ある本の最後のページを参照しようと思ったら、リーダーの把手をぐるぐる廻し続けなければならぬ。運動になつていいのかも知れないが、時間のかかることおびたしい。そういうわけで、マイクロ・フィルムから学校の費用で堅牢に製本された本を作つて貰った。それを何年も続けるうちに、私の研究室はビューリタン関係の原典のちよつとしたコレクションを備えるようになった。このコレクションの中から私の学位論文「清教徒革命における平等派の理念」が生まれた(それにしても何と古臭いタイトルを付けたものか)。

*

レヴェラーズが一六四〇年代の急進派なら、第五王国派が五〇年代の急進派である。前者の研究が一応終ったら後者をも分析して、合わせて一冊の単行本にしよう、と私は計画した。レヴェラーズなら、その名前からこのグループの主張は何となく見当がつくように思われる。多分、財産の平等化か何かを主張したのでらう、と。レヴェラーズというのは反対者から付けられた仇名であり、仇名としては正にそういう意味であった。けれども、仇名を付けられた側はロンドンの中小企業者のグループであり、プチブルとして失うべき財産を持っている連中なので、この仇名を言われなき誹謗として嫌悪した。彼らは言わばプチブル的急進派であり、信仰の自由（国教会制の廃止）、政治の自由（選挙権の拡大）、経済の自由（組合規制の排除）を主張した。

第五王国派となると聞いただけでは何のことかわからない。ピューリタン革命前夜の改革派の人びとに共通する歴史観があった。それは前近代と近代との二つの思潮がぶつかり合って大渦を引き起こす一七世紀に相応しい歴史観であった。旧約聖書ダニエル書に、世界史は四つの王国の興亡を経て神の国に至る、と語られる箇所がある。その最初の王国はバビロニアであるが、他の三つについては特定されていない。それを、あるピューリタンの神学者がメデイ

ア、ギリシア、ローマと並べて、ローマ教皇制が健在であり、教皇制のイングランド版であるアングリカニズム（イングランド国教会制）が残存している現代はなお第四王国ローマの圧制下にある時代だ、と断定する。そこから第五王国たるキリストの王国の準備をしなければならぬ、という主張が出てくる。その準備というのは国教会主教らの教会権力およびそれと結託している世俗貴族らの専制を倒し、貧しき聖徒らの独裁制を樹立させねばならぬ、という一種の革命思想である。革命が始まったばかりのころは、この思想が改革派の一つに結びつけていたが、内戦の進行とともにその色は褪せ、五〇年代には第五王国派と呼ばれるセクトの専売特許にまで収縮していた。しかしレヴェラーズが力尽きた後の急進的改革派として、政治権力の中核近くまで浸透して共和国政府を脅かす活躍を示し得たセクトであった。

勤務先の大学では在外研究員の順番が私に廻って来ようとしていた。この機会を逃がさず、英国の、ロンドンの、B・Mの図書館に赴いて集中的に第五王国派の資料を読み込もう、と私は思った。

*

一九七〇年三月三〇日に私は東京を発ってロンドンに向かった。私はブリティッシュ・カウンシル（B・C）支援の研究者ということになっていたが、B・Cによる研究支援

は下宿探しから教授紹介から研究旅行の旅程表作成から、何から何まで到れり尽くせりで、何かにつけて文句ばかり言っている私も、兜を脱いでお礼を申し上げなければならなかった。家族を連れて行ったので下宿探しに手間どり、到着後一〇日ばかりしてから、B・Cの紹介状を貰ってB・M図書館に駆けつけた。B・Mの玄関を入ると広いロビーがある。それを真直ぐ突切ったところに、守衛がたむろしている小さな入口がある。これが図書館の入口で、守衛に入館証を見せて入る。短い廊下を行き着いてもう一つの入口を入ると、写真でお馴染みの丸天井を頂いて拡がる円形の大閲覧室だ。しかし私が目指すのは一七世紀の古い本だから大閲覧室を通り抜けて廊下に出、その突き当りの部屋に入る。これがノース・ライブラリーと称する稀観書閲覧室である。六、七〇人も入れれば満員になる狭い矩形の部屋だが、円形大閲覧室が出来るまでは、ここが唯一の閲覧室だったそうだ。カウンターに頼んでトマソン・コレクションの数冊を借り出した。紙は粗末だが破損はまったく無く、仔牛の皮と思われる皮革で嚴重かつ豪華な表装が施してあるのは意外だった。しかも表紙には国王ジョージ三世のネームが入っている。それらの本を目の前に並べて、しばし私は手を付けることが出来なかった。家に持って帰らねば熟読できないなどと言う文句も影をひそめた。

昼食にはカフェテリアがあると聞いていたが、行って見ると単なる喫茶室で、しかも大変な混みようだった。次の

日からサンドウィッチの昼食持参で朝から夕方まで図書館通いが始まった。昼食は正面玄関を中心にコの字形に拡がった柱廊の蔭のベンチで食べる。観光バスが何台も何台もお客を運んで来る。時折りバスから降りた団体客がすぐに玄関を入らないで、建物を背景にす早く並んで記念撮影をしてサッと入って行くのは日本の観光客だ。そういう光景を見ながら食事を終えると私はまたノース・ライブラリーに戻る。

B・M図書館には隠れたロンドン名所がある。K13番の座席(大閲覧室の)で、マルクスはこれを定席にして資本論を書いた、というのだ。もっとも座席番号には幾通りもの伝説があるのだが、K13番にそっと坐って見ると、それは部屋の間っこで人通りも少ないし、気難しいマルクスには相応しい席だという気がする。ジョージ・ギッシングには『ヘンリー・ライクロフトの手記』という創作的エッセーがあるが、若き日の主人公(作者とオーヴァラップする)は、飢えに耐えつつひたすらにB・M図書館で古典に沈潜する。夏目漱石の留学中の先生クレイグはシェイクスピア研究のためB・M図書館に通い詰めるべく、ウェイルズのある大学の教職を投げ打った。S・R・ガーディナーは大学の背景は何もないまま、ひたすらB・M図書館に立て籠もって革命前史10巻、内乱史4巻、共和国史4巻の大作を著した。ガーディナーのような人がいないかと、時おり私はあたりを見まわした。

夏休みが終るころ、私は第五王国派研究の中間報告を書き上げタイプ印刷にしてB・Cの紹介状を副えて幾人かの研究者に送った。しばらく日を置いて私は彼らを順ぐりに訪れ、論文について忌憚のない意見を徴した。初対面の異邦人に遠慮のない意見を告げる人はさすがにいなかったで、私の試みは失敗した。しかし後日長く交際できた同士の士を得たのは望外の仕合わせであった。

*

B・M図書館は、その後間もなくミュージアムから独立してブリティッシュ・ライブラリーと呼ばれるようになった。閲覧室は元のままであるらしいが、書庫はセント・パウルス駅の隣りに広大な敷地を購入して飛躍的に拡大された。新書庫と旧閲覧室の間には小さな地下鉄が設けられて、図書類は大変なスピードで運ばれると新聞で読んだが、真偽のほどは定かでない。もう一つの変化は、余人は知らず、私には大きな変化である。一年の滞在期間を終って五六年後のことだろうか、トマソン・コレクションが全部マイクロフィルム化され、約五百万円で手に入れられるようになったことである（その価格は今ではもっと下がっているようだ）。私の当時の勤務先の大学でも早速購入した。これでトマソンに接しようとする研究者は、はるばるロンドンまで出かけなくても済むことになったのであろうか。フィルムが全て現像され製本されること、英国の碩学が全

て日本に移住して研究生活を続けること、これら条件が満たされさえすれば、答は然りである。

（聖学院大学政治経済学部長・教授）

第20回（一九九八年度）日本生命財団出版助成図書

刊行期間 平成十一年四月～平成十二年三月

① 都市化とタニ

—— コンクリート建造物のコケに生息するササラダニ類 ——

東海大学出版会

青木淳一（横浜国立大学環境科学センター教授）

② 日本人のからだ

—— 解剖学的変異の考察 ——

東京大学出版会

編者代表・佐藤達夫（東京医科歯科大学医学部教授）

③ 賀茂別雷神社境内諸郷の復元的研究 法政大学出版局

須磨千穎（南山大学名誉教授）

名古屋大学出版会

④ 平安時代彫刻史の研究

伊東史朗（名古屋大学文学部講師）

京都大学学術出版会

⑤ 脳とワーキングメモリ

芋阪直行編（京都大学大学院文学研究科教授）

九州大学出版会

⑥ 日韓民俗文化比較論

金宅圭（嶺南大学校名誉教授）

九州大学出版会

⑦ 男性百歳の研究

編著者・秋坂真史（琉球大学医学部助手）

* 日本生命財団は優れた研究成果でありながら出版の困難な学術専門書を対象に大学出版部協会加盟出版部に出版助成を行っている。

大学出版部の社会的役割

―産能大学出版部の場合―

高橋 一夫

この度、第三回日・韓・中大学出版部協会合同セミナーにおいて、「大学出版部の社会的役割」という視点から韓国・中国の大学出版部協会の皆様にご報告するに当り、アウトラインをここに報告いたします。

今回日本の大学出版部の中では異質ともいえる個性のある出版活動を行っているわが産能大学出版部の活動を報告することも、三国の合同セミナーでは何らかの参考になることもあろうかと思ひ、出版活動の内容を述べてみたいと思ひます。

一九九四年度日韓大学出版部協会合同セミナーで、東京大学出版部の渡辺勲氏は、「大学出版部の役割」を、

①教育科目ごとにすぐれた教科書を編集し、出版すること。
②優秀な研究者を発掘し、高度な学術書を編集し出版すること。

③教育者・研究者としての大学人の社会に向かつての発言を、読みやすく判りやすい啓蒙書として編集し出版すること、と定義されております。

われわれ産能大学出版部も、大学出版部としての基本姿勢は同様で、この使命を継続的に果たしていくことが大学出版部の社会的役割であると認識し、今現在もその役割をいかにして達成していくか、母体大学の使命と整合性を図りつつ出版事業を推進している次第です。

産能大学出版部は大学の一部門として、一九六五年に誕生いたしました。マネジメント専門の教育活動を行う大学の一機関として、産業界のニーズ・動向をいち早く捉えた出版、ビジネス専門書の刊行を目指し、現在までに一五〇〇点ほどの刊行点数を持つに至っております。

出版部発足当時は日本経済も成長期にあり、産業界の人々も経営に関する情報を積極的に取り入れたいと考えていた環境にありました。日本の経営・管理技術の未熟さが指摘され、産業界がこぞってアメリカの経営・管理技術を積極的に導入し、生産性の向上に一丸となっていた時期でもあります。

そのような産業界の現状を背景に、産能大学の創立者、

上野陽一訳によるフレデリック・テラーの『科学的管理法』を第一作とし、『価値分析ハンドブック』『コストテーブル』などが出版されて、創設時の産能大学出版社は好調なスタートを切りました。

また当時、産能大学は総合研究テーマ「目標概念」を掲げて研究開発を行いました。企業の全体目標と個々人の目標との関連について研究した「目標がいかにして人々を動機づけ、持てる能力を一〇〇%発揮することができのるか」という「目標概念」の考え方は、その当時の産業界にとっては新しい視点として受け入れられ、今日でも日本の産業界の基本的な経営管理理論となっております。

産能大学出版社はシュレイの『結果のわりつけによる経営』が、私たちの考えているものと全く同じであると判断しこれを翻訳出版し、続いて産能大学関係者によって『目標管理の考え方』『目標管理の進め方』などを刊行し大きな反響を得ました。

またこれら「目標と動機づけ」の研究を進めるに従い、行動科学的な考え方の導入が欠かせなくなつてまいりましたので、さらに独自の研究を進めるとともに適正な書物の探索を行いました。ブレイク、ムートン共著の『マネジリアル・グリップ』がそれで『期待される管理者像』という邦訳タイトルで刊行しました。

さらに行動科学の分野として、ダグラス・マクレガーの『企業の人間的側面』、ゲラマンの『人間発見の経営』、マ

ズローの『自己実現の経営』など経営管理に関する代表的な著作の翻訳を刊行しました。

また日本経済が国際競争力を付けると、産業界は内部管理による生産性の向上のみではなく、企業戦略そのものにも取り組むようになり、翻訳書よりも日本企業の独自の経営手法が求められるようになりました。東京芝浦電気の『目標管理実践マニュアル』は目標管理実践面でのマニュアルとして、また東京芝浦電気の社長であった土光敏夫先生の『経営の行動指針』はベストセラーとなって話題を呼びました。

私たち産能大学出版社の出版活動は産能大学の研究課題とともに展開され、その研究成果の発信部署としての役割を果たすと同時に、独立収益部門としての役割も果たしてまいりました。

日・韓・中大学出版部協会合同セミナーの主題であります「大学出版社の社会的役割」という視点から産能大学出版社の出版活動を紹介すれば、日本の産業界に対して、経営についての「すぐれた教科書」「高度な学術書」「判りやすい啓蒙書」を継続的にまた一貫して出版してきたことであると想っております。そしてこの出版活動を将来的にも継続していくことができなければ「大学出版社」の役割を果たすことはできないと考えております。

(産能大学出版社)

ネットワークがもたらす本と読書の環境変化

植村 八潮

米英を代表する出版雑誌が相次いで、母国の大学出版部を取り上げている。昨年のアメリカ大学出版部協会総会についてはパブリッシャーズウィークリーの記事とともに、すでに小誌(四〇、四一号)で報告がある。さらにイギリス大学出版部の動向についてブックセラー(三月一九日号)が特集を組んでいる。両記事に共通するキーワードがアマゾン・コムに代表される「オンライン書店」と、必要に応じて本を印刷製本する「オンデマンド出版」である。

いずれも学術出版の将来を担うテクノロジーとして、大学出版の積極的な取り組みが紹介されている。期せずして欧米の大学出版部がデジタル出版に取り組んでいるのは、単にブームだからとは言い切れない。

すでに学術情報の流通では、紙に刷らないデジタルデータでの蓄積と配信が「オンライン出版」という概念で形を見せ始めている。デジタル技術とネットワークが、どのような変化を本と読書にもたらそうとしているのか。欧米の取り組みをふまえ、振り返ってみたい。

● ネットワークによる出版流通の変化

自分の意見や思想を第三者に伝えようとした場合、声の届く範囲は狭いが、紙に記録することで、より多くの人に伝えることが可能となった。印刷技術によりその量が飛躍的に増大し、版元として本の制作を請け負う出版社や近代流通システムとして取次業や書店が生まれた。

今日の出版流通は、紙の本を前提とした情報の流通システムといえる。当然の結果として、ネットワークインフラの登場により、著者から出版社、取次、書店を通して読者までの流れに変化がもたらされている。ニコラス・ネグロポンテは『ビーイング・デジタル』(九五)の中で「出版社は情報を送り届けるビジネスなのか(ビットのビジネス)、それとも製造業なのか(アトムのビジネス)」とした上で、「本を読者に送り届けるには、輸送や在庫のための費用がかかる。(中略)もっとまずいのは品切れもあり得ることだ。デジタル形式の書物は決して品切れにならない」と記している。執筆当時は未来の予言として受け止められたことが、

もはや現実のこととなっている。

●オンライン書店の登場

気に入ったお菓子は何回でも買うが、その意味では同じ本を一人が二冊は買わない。これは書店にPOSレジが必ずしも有効でないことを示している。POSデータは人気商品と死に筋を見つげるのに有効であるが、売上げをマスのしかとらえず、パーソナルな情報をそぎ落としている。

しかし、オンライン書店ならば誰がどのような本を買い、そして同じ本を買った人は他に何の本を買ったかが瞬時にわかるのである。一度オンライン書店で購入した人には、類書が発売されるたびに新刊紹介することもできる。専門書や少数出版物に必要な、細やかなマーケティングや顧客管理が、ネットワークにより再び可能となったのである。

一方、少数数出版物を書店店頭で探すことはきわめて困難な状況にある。オンライン書店が少数数出版社にとって期待される理由でもある。ベストセラーから在庫僅少の書籍まで、すべてを取り揃えられるのが理想的オンライン書店なのである。

このようにオンライン書店は、顧客管理と迅速な受発注を可能にした。ただ、従来同様、紙の本(アトム)を物流で取り扱う必要があり、書籍データベースだけでは競争の激しい中で勝ち抜くことはできない。最近、アマゾン・コムは、いち早い配本サービスのために巨大な流通倉庫を建設している。それは全米最大の書籍取次会社イングラムに

匹敵する規模という。在庫を持たずに世界最大の書店と称してきたアマゾン・コムの優位性は、結果的に崩れつつあり、今後の成長を疑問視する声もある。

●学術論文で始まったオンライン出版

一方、ネグロポントが指摘したようにビット情報の配信、つまりオンライン出版ならば在庫を持たず流通も容易である。欧米では、配信に加えデジタルデータでの蓄積も含めて電子図書館という概念でとらえている。

オンライン出版の原型は、インターネットの初期段階から試みられていた学術論文の流通にみることができている。

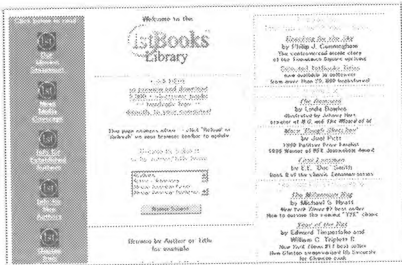
九一年八月、ロスアラモス国立研究所のポール・ギンスバーグは、サーバーに蓄積した高出力エネルギーに関する学術予稿集をネットワークを通して配布し始めた。インターネットが脚光を浴び始めた時期だけに、科学ジャーナリズムは、この論文流通形態が従来の紙への印刷を基本とした出版社にとって最大の脅威となると報道した。いわゆるギンスバーグショックにより、著者と読者が直接、論文を情報交換し出版社は不要になるとした予測すらあった。

これを機会に世界の大手学術出版社は、書籍の電子化とオンライン配信の研究を開始した。オランダのエルゼビア・サイエンス社は、アメリカの九大学と共同でTULIP(The University Licensing Program)プロジェクトを九一年から九五年まで行った。紙で発行されていた四三の学術ジャーナルを、画像データとOCR入力によるテキストデータと

してサービスした。この実験成果を基に九五年から商業サービスを開始し、現在二二〇〇の雑誌タイトルを電子化して販売している。さらにインターネットの普及に伴いオンラインサービスも開始した。

サービスの準備を始めた頃は、雑誌ごとにデータ形式がバラバラであったが、これをSGMLにより統一し、紙、CD-ROM、オンラインのいずれのメディアでも利用が可能とした。その膨大な投資についてエルゼビア・サイエンス社は、将来、学術情報の世界では紙媒体がなくなることを想定した行動とし、「もはや後戻りのきかないデジタル化の道」という。

●商業オンライン出版の動向



ファーストブックス・ライブラリー
<http://www.1stbooks.com/>

インターネットの初期の段階でギンスバーグが学術論文を配信できたのは、課金について考慮しなくてよかつたからである。その後の技術進歩により、課金システムを持った商業オンライン出版が数多く登場した。今のところ好調な例はやはりアメリカにある。一例を挙げると九七年創業ファーストブックス・ライブラリーは、今や二二〇〇を超える

タイトルと数百の無料タイトルを誇り、月間ヒット数が三〇万回を誇るまでになった。PDFやワードファイル、あるいはプレンテキストで準備され、一部の立ち読みなどもできる。著者とはオンライン送信に関する個別の契約が行われているとのことである。

最近、紙の本を出版した著者が、自らウェブページで原稿を公表する問題が生じている。特に大学の教員や研究者に多いようである。出版社が著者との出版契約でデジタル化権を設定するということは、出版社にも預かった権利を行使する義務が生じる。今後、中小出版社がオンラインサービスを持たず、契約を曖昧にしたままでは、オンライン出版社の困い込みにあう可能性がある。

●オンデマンド印刷によるカスタム化

オンデマンド印刷には、リンクを利用したカラー印刷と、コピーの原理をベースに製本まで行う二つのタイプがある。注目すべき点は、本の内容をデータベース化し、授業に必要な箇所を組み合わせて出力するカスタム出版が可能なのである。日本でも学生人口の減少を機に、少人数教育の導入が始まっている。教科書採用は少数数となり、学内専用の軽印刷によるテキストも増えている。

大学教科書のカスタム出版としては、マグロウヒルがコダック、ダネリーと組んで九〇年から始めたprimisが先駆的である。ウェブページには「ニーズ、教育法、スタイル、コンテンツ、構成にあわせてカスタム化する」と書かれて

いるが、今でもカスタム出版の重要なコンセプトといえる。このサービスの終了が噂される中で、新たに同様なサービスも始まっている。イングラム系のライトニング・プリント社(<http://www.lightningprint.com/>)は、ハーバリー

コリンズやオックスフォード大学出版などと契約し、積極的にデジタルライブラリーを構築している。またゼロロックスの「ブックインタイム」サービスもよく知られている。

一方、作家自らの行動として、絶版になった本や少数民族文学の作品を発表するため、九七年にスウェーデンの作家たちによる「ブックス・オンデマンド」(<http://www.books-on-demand.com/>)の運動が始まっている。

今のところ、コストとしてはむしろ高めかもしれないが、魅力あるオンデマンド出版が世界中で始まっている。

● オンデマンド印刷がもたらすブックバン

本を編集する経験からいえば、どんなにベストセラーをねらったとしても、一人一人の読者が見えてこなければ失敗である。極論すれば本にはマスマーケットなどなく、個人個人の購入による一冊ずつの積み重ねの結果がベストセラーになっているだけである。つまり本は多様性に富んだパーソナルメディアである。この点でインターネットと相性がよい。

オンラインでは個人にあわせてカスタマイズされたコンテンツが、膨大な量となって流通している。本も同様である。いや、同様になってほしいと夢見ている。オンデマン

ド印刷が普及すれば、一人一人の読者にあわせて編集された多量の本の出版も可能となろう。



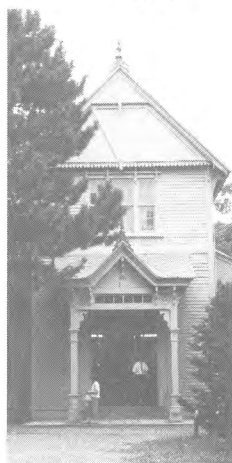
デジタル技術とインターネットの普及は、さまざまな分野で従来の構造に変化をもたらし、枠組みを壊し、新たな市場を突如として出現させてきた。出版界が電子出版に抱く現状打開への期待と不安がここにある。現在までのところ、電子出版による解答は見えてこない。ただ注意して避ければいけないのは、電子出版における成功を売上高や市場占有率といったマスマーケットの論理だけでとらえることである。

ネットワークとデジタル技術が出版にもたらす影響については、それがあまりに急なため、技術的变化に目が奪われがちである。その結果、売上げに結びつけた「販売ルート」や「新たな市場」という、ことの本質を忘れた過度な期待や、変化に対する不安の声を耳にする。

オンライン出版、あるいはオンデマンド出版が「グーテンベルグ以来の革命」と形容されるのは、それがコミュニケーション、表現力、情報流通と、どれをとっても爆発的な増大を生み、学術文化に多大な影響を与えているからである。「新たな市場創出」というバラ色の夢を描く前に、将来に対する「学術出版の基盤づくり」ととらえるべきであり、さらに市場原理の優先により見失った本作りの原点回帰でもある。

(東京電機大学出版局)

日本の自然史博物館・大学博物館の魁 北海道大学農学部博物館を訪ねて



北海道大学農学部
博物館
(沖田慎二氏撮影)

第二次博物館ブームである。神戸市は「二〇世紀博物館群構想」を復興のシンボルに掲げ、日本版スミソニアン博物館群をめざしている。学術審議会も大学所蔵学術資料の保存・活用のために、専門施設の設置を求め、一九九六年には東大総合研究資料館が東大総合研究博物館として生まれ変わった。「大学博物館」の誕生である。その後、京大、東北大そして北大に「大学博物館」が次々と誕生している。

「博物館」という名称は、福沢諭吉が『西洋事情』で使ったのが定着したものだという。では日本の博物館の生みの親は誰か。それは北海道の開拓にあたって明治政府が招へいたアメリカ人ケプロンである。彼は明治四年に博物館の建設を開拓次官黒田清隆に提案したといわれている。彼の考えていた博物館は、自然史博物館であったらしい。

それでは、日本の自然史系博物館第一号はどこか。明治一〇（一八七七）年に商品陳列所として札幌に開館した開拓使札幌仮博物館である。仮博物館はその後、札幌博物館となり、さらに明治一七年に北大の前身である札幌農学校

に移管され、その所屬博物館となった。ここでようやく今
回紹介する北大農学部博物館と話が結びつくことになる。

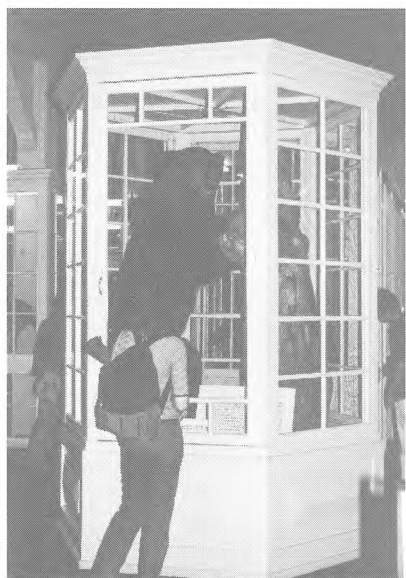
日本最古の現役博物館

博物館は、同じ農学部付属の植物園のなかにある。この植物園は明治一九年の開園で、小石川植物園に次いで日本で二番目に古い。クラーク博士が教育研究に不可欠であると熱心に提言したことにより設置されたという。設計は初代園長となった宮部金吾博士である。博物館西隣には、バチェラー記念館がある。この建物はアイヌ民族の研究で知られる英国人バチェラーの自宅であった。現在は閉館されているが、アイヌ・ニグヒ・ウイルタの北方少数民族の資料が展示されていた。

では博物館を案内しよう。設計はアメリカ人建築家ベイトマンによる。明治初期の代表的洋風建築で、平成元年重要文化財に指定されている。切妻にある星印は開拓使旗章のシンボルマーク五稜星である。明治一五年に建てられてから一二〇年近くにわたって現役の博物館として活躍して



開拓使札幌博物場の開業式
(北海道大学附属図書館所蔵)



一晩に7頭の馬を倒した熊の剥製
(沖田慎二氏撮影)

北海道大学農学部博物館

〒060-0003

札幌市中央区北3条西8丁目

開館時間 4月29日～9月30日まで

午前9時～午後4時

10月1日～11月3日まで

午前9時～午後3時30分

休館日 毎週月曜日

(11月4日～4月28日までは冬季閉館)

交通 JR札幌駅から歩いて15分

いる。これは日本で最長老の博物館である。
 貴重なお宝の数々
 正面をはいってすぐに目に飛び込んでくるのは、一晩に七頭の馬を倒したあと、屯田兵により撃ち取られた金毛のヒグマである。なお収蔵庫には、明治一年に一夜に三人を喰い殺し一人に重傷を負わせたという人喰い熊が保存されている。吉村昭の『罨嵐』を思い出し、身震いする。この他、貴重な標本としてはエゾオオカミがある。明治二〇年代に絶滅してしまい、世界中でここにしか残っていない。ブラキストン線として動物地理学の教科書にその名を残しているブラキストンが、研究に用いた鳥類標本もある。
 「南極物語」で若い人にも知られている樺太犬タロの剥製

もある。タロは昭和基地から生還後、死ぬまでの九年間を博物館で飼われていた。内村鑑三が製作したアワビの発育標本が残されているのも北大らしい。
 博物館を案内してもらった後、『札幌博物館案内』という標本目録を兼ねた小冊子を拝見した。発行の趣旨に「…本博物館は、大学の学生生徒の研究をもってその本旨とするはむろんのことなれども、また一面には普通教育と社会教育とに資するはその目的たること明らかなり…」とある。奥付を見て驚いた。なんと明治四三年の発行である。これこそまさに「大学博物館」の魁である。

(北海道大学図書刊行会・成田和男)

大学出版部ニュース



1999年度通常総会・懇親会

▼一九九九年大学出版部協会通常総会開催
大学出版部協会一九九九年通常総会が、四月二八日（水）午後一時より、私学会館アルカディア市ヶ谷において、二十三大学出版部から二十六名の参加があり、開催されました。一九九九年度の活動計画の承認、役員の変更などの他に、大学出版部協会ウェブサイトの開設、麗澤大学出版会の加盟が決議されました。その後、懇親会が開催され、八十四名が参加しました。

▼大学出版部協会公式ウェブサイト開設
大学出版部協会では、一九九八年に実験的に「大学出版部協会ウェブサイト」を開設

し、広報の働きを果たしてきましたが、この一年間で、インターネット、ウェブサイトを取り巻く環境は、日本の国内外を問わず、急速に変化してきました。インターネットはこれまでにない書籍の流通のあり方、また書籍そのもののイメージを変えつつあります。大学出版部協会は、このような状況に対応すべく、一年間の実験段階を経て一九九九年六月から、次のURLに大学出版部協会公式ウェブサイトを開設することになりました。
<http://www.aijup-net.com/>

▼麗澤大学出版部が大学出版部協会に加盟
二十五番目の出版部として、麗澤大学出版部の加盟が決定しました。麗澤大学には、これまで広池学園出版部としての活動がありましたが、一九九九年四月一日に大学出版部が組織され、学術書と教養書を中心とした出版活動を行うとのことです。なお取次口座敷、バックリストなどが基準に達しており、正会員として加盟が承認されました。

▼大学出版部三十五周年記念ブックフェア
大学出版部協会設立三十五周年を記念して、一九九八年五月から一九九九年三月まで、加盟大学を中心に全国六〇の店舗で開催してきましたブックフェアの売上集計がまとまりました。冊数では、四三、〇五七冊と目標を大きく越えました。

北海道大学図書刊行会

▼浅田政広著『北海道金鉱山史研究』（A5判・八二〇〇円）一三鉱山の発見・開発の経緯、採掘量・従業員数の推移、

鉱山街の形成、災害・鉱害、閉山を詳述。

▼加藤和秀著『ティームール朝成立史の研究』（A5判・九五〇〇円）ペルシャ語史書とワクフ文書等にもとづきティームール朝の形成と発展過程を解明。

▼大原雅編著『花の自然史』（A5判・三〇〇〇円）花の多様性とその美しさに秘められた進化の謎を多彩な側面から紹介。

▼田村善之編『情報・秩序・ネットワーク』（A5判・六〇〇〇円）インターネット上の著作権や表現規制問題など情報化社会の様々な問題に多角的に切り込む。

▼長谷川晃編『市民的秩序のゆくえ』（A5判・四二〇〇円）都市の公共性や多文化主義など、多様な視角から現代社会秩序の動揺とそのゆくえを探る。

▼秋月俊幸著『日本北辺の探検と地図の歴史』（B5判・八三〇〇円）北大図書館北方資料室が世界に誇る貴重な資料を基に、日本北辺の地理的探検と地図製作の問題を総合的に著述。北方地図学史・日本北辺史の決定版。日生出版助成図書。

聖学院大学出版会

▼組織神学研究所編『パウル・ティリッヒ研究』(三八〇〇円・A5判・二九六頁)

パウル・ティリッヒはK・バルトと並ぶ神学者であるが、宗教学のみならず、哲学や思想史、さらには心理学、美術史の分野にも広く影響を与えてきた。本書は、ヘーゲル、ハイデガーなどの思想を踏まえて執筆された『組織神学』を中心に、象徴論、存在論などティリッヒ思想の特色を際立たせながら、その思想の限界と課題を批判的に論じた論文集である。

▼W・パネベルク『近代世界とキリスト教』(深井智朗訳・二二〇〇円・四六判・一七六頁)

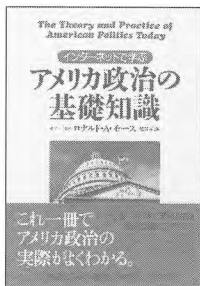
ヴェーバーやトレルチによって提起された「近代世界の成立に与えたキリスト教の意義」を、ポスト・モダンが叫ばれ、近代批判がなされている現代の視点から根源的に問いなおす。特に、環境破壊、産業社会の諸問題から近代批判がなされ、世俗化の進行により宗教の社会的機能が失われたと見なされている中で、近代とは何か、近代世界の成立とキリスト教の関わりを論ずる。

麗澤大学出版会

▼ロナルド・A・モース／見付宗弥『インターネットで学ぶアメリカ政治の基礎知識』(本体二五〇〇円)

本書の第一の特色は、アメリカで普及しているインターネット活用学習法を取り入れている点である。さらなる調査研究のために米政府機関、議会、研究機関など厳選した有力情報源のホームページアドレスを二七〇余件紹介。しかもその全てが著者のホームページから完全リンクしているので、読者にとってはたいへん便利だ。

著者は米国防総省、国務省、経済戦略研究所等に二五年勤務し、現在、麗澤大学教授。本書はその経験に基づき、アメリカ政治の理論と実際を日本と対比しつつ書き下したもので、学生は勿論、政治家務家にも役立つ内容となっている。



『インターネットで学ぶアメリカ政治の基礎知識』
本体 2500円(税別)
A5判・上製・288頁

慶應義塾大学出版会

▼『若林真 個人訳 アンドレ・ジッド代表作選(全5巻)』(セット価格二五〇〇〇円)。本国フランスではその再評価がはじまっている大作家ジッドの代表作選集。ジッド研究の第一人者による個人訳でジッド作品が甦る。ジッド独自の作品分類による5巻構成とし、ジッドを知るために重要な作品をすべて網羅した。各巻には訳者自身の解説論文を収録。

▼『アートとコンピュータ 新しい美術の射程』(藤幡正樹著、二八〇〇円)。
メディア・アーティストとして国際的に活躍する著者が、アートとコンピュータの関わりとは、バーチャルとは、アルゴリズム・ミック・ビュティとは、などの示唆に富む議論を展開する。未来の見え方が変わるエッセイ集。

▼『福澤諭吉論の百年』(西川俊作・松崎欣一編著、二二〇〇円)。百年の歴史をもつ慶應義塾『三田評論』。そこにかつて掲載されたものから選ばれた福澤諭吉をめぐるエッセイを収録。福澤諭吉を、今あらためて時代の「テキスト」としてひととこうとする読者におくる、異色出色の福澤諭吉論18篇。

産能大学出版部

▼『セールスレターで「住宅」が売れる本』三島俊介著（二〇〇〇円）

景気は冷え切り、モノが充足している経済社会において、営業マンはいかにして顧客の心をつかむのか。

それには説得力もさることながら、素直かつ真摯な気持ちを、熱意をもって相手に伝えることである。それには心のこもったセールスレターが威力を発揮する。本書は、住宅営業マンのために、一六〇余にも及ぶ文例をまとめたものである。

「手紙を書くのが苦手」と思う人の参考書、会社の指導書として最適である。

▼『日本の中の世界一企業』石川昭／根城泰共著（一六〇〇円）

長引く平成不況の中、スピード・専門性を武器にした專業型の中堅企業から世界トップシェアを誇る企業が何社も現れている。

本書はこれら一八社をとりあげ、どのようにして世界一企業にのぼりつめたのか。世界一企業のトップシェア製品や経営戦略などの分析を通じ、「世界一企業」になるための原則を探る。

専修大学出版局

▼専修大学今村法律研究室編『帝人事件別巻二』（四一七五円）本書の原本をふくむ「今村力三郎文庫」は、本学が所有する貴重図書・資料のうちでもとくに量が膨大なものであり、これまでも『金剛事件』『五・一五事件』『神兵隊事件』『血盟団事件』などが復刻刊行されている。「一にも二にも人権擁護」の信念を貫き、明治・大正・昭和の三代の長きにわたって、軍部と司法部の人権侵害に争闘してきた弁護士・今村の良心の軌跡であると同時に、わが国の近代史の記録の一端であるともいえる。

▼本巻で帝人事件シリーズは完結するが、全一三巻に収録された内容は以下の通りである。(1)鑑定答申書、予審証人訊問調書、(2)(3)予審証人訊問調書、(4)証拠物品目録、告発状、始末書、聴取書、(5)聴取書、強制処分請求書、搜索調書、捜査押収調書、答申書、提出書、(6)(7)(8)(9)予審被告訊問調書、(10)予審被告訊問調書、検証調書、(11)予審終結意見書、予審終結決定書、上申書、(別巻一) 弁護士今村力三郎氏帝人事件弁論、中島久馬吉被告事案件弁論稿、(別巻二) 判決書、判例解説。

玉川大学出版部

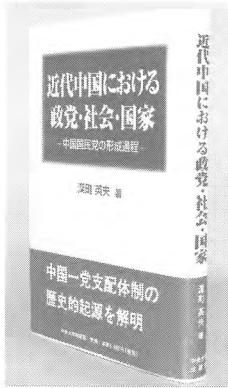
▼宗教という営みは人間の歴史と共に古いが、学問として認知されるようになったのは一世紀程前のことである。文化と宗教を考えるシリーズに二点が加わった。▼増澤知子著／中村圭志訳『夢の時を求めて―宗教の起源の探究―』（四八〇〇円）デュルケム、ミュラー、フロイトのテク

ストを再読し、宗教の起源に内在する論理の矛盾をポスト構造主義の立場から分析する。原書は英語で書かれているが、著者はアメリカで活躍する日本人宗教学者である。▼J・ヒック著／間瀬啓允・本多峰子訳『宗教多元主義への道―メタファーとして読む神の受肉―』（四四〇〇円）西欧ではキリスト教は唯一神の宗教であり、他のどの宗教よりも優れたものと解釈されてきたが、著者はこの伝統的な正統主義神学に対し異を唱える。宗教はそれぞれ異なる文化を反映し、超越的な究極のリアリティに対する人間の応答であり、どれもみな真なるものであるとし、キリスト教の多元主義的自己理解の道を提唱する。現代イギリスを代表する宗教哲学者である著者の思想は、遠藤周作『深い河』創作に大きな影響を与えた。

中央大学出版部

▼深町英夫著『近代中国における政党・社会・国家―中国国民党の形成過程―』（本体三六〇〇円）

王朝体制が崩壊した後、巨大な中国を統一的に支配できたのは、議会制・連邦制等ではなく、中国国民党が創出し中国共産党が継承した「党国体制」であった。本書は現代中国の源流を成すこの近代史上の体制転換を検討するため、中国国民党の組織が国家―社会関係の変容の中で形成されていった過程を中国（大陸・台湾）・シンガポール・アメリカで収集した貴重な資料を用いて分析し、新たな中国近代史像を描き出すとともに、二十一世紀の中国の行方をも展望するものがある。



東海大学出版会

▼日本私立大学連盟編「シリーズ大学の教育・授業を考える」／第一巻『大学の教育授業をどうする―FDのすすめ』／第二巻『大学の教育・授業の変革と創造―教育から学習へ』（各巻、A5判・二二〇頁・本体一九〇〇円）

「日々変化し多様化する現代社会のなかで、いかにして学生たちの学習意欲に応え、意義ある授業を展開できるのか、もって今後の大学教育のありかたを考える」ことを目的としたワークショップが、一九九四年から年一回、日本私立大学連盟によって開かれている。

本書はこのワークショップ四回分の内容を二巻に編集し直したものである。第一巻では、授業改革を実践しているさまざまな大学教員の授業例を紹介する。第二巻は「大学教員の役割とは何か」を模索する教員の対話と実践の記録である。

本シリーズには、次世代を担う学生に学問や研究成果をいかにしてわかりやすく伝えるべきかという教員の熱意と、現代の大学が抱える問題を深慮し、真剣かつ誠実に対応している大学教員の姿が収録されている。

東京大学出版会

フィールドワークの第一人者が、現代演劇の舞台裏に挑む『現代演劇のフィールドワーク―芸術生産の文化社会学』（佐藤郁哉著、A5判・五〇〇ページ、五二〇〇円）。

「芸術はビジネスになりうるのか？」「パトロン付きの芸術家に真に自由な表現は可能か？」―近代芸術成り立ちの難問に、劇場の表舞台と裏舞台、稽古場劇団事務所、海外の俳優組合とNPO：演劇がつくられるさまざまな「現場」での徹底した取材を通して立ち向かい、文化産業と芸術行政の未来を描く。

また、中堅劇団の制作部員として業務に携わり参加観察するなど、斬新な視点と手法で、現代社会におけるフィールドワークの可能性と、日本の文化社会学の新境地を切り開く。

諸分野のフィールドワーカー、芸術家、文化担当官、必読の書。大部だが、物語形式の語り口に、思わず引き込まれる。

著者は一貫して「文化生産」の現場に興味をもち、まず若者文化を扱った「暴走族のエスノグラフィ」とそして本書、今後は出版や学問を対象にしたいという。

東京電機大学出版局

獲物との再会を祈り、古代人は狩りの様子を洞窟の壁や天井に描いた。やがて文字が生まれ、媒体が工夫され、多くの文明が開く。各種の印刷術を経て活字印刷の発明に至るが、そのもたらした情報量の爆発が「近代」を準備したことは様々に論じられてきた。



『メディアの技術史—洞窟画からインターネットへ』
本体 2300円(税別)
A 5判・220頁

本書は人間が情報を何に乗せてきたかということを取り口に、二万年余のメディア史とその背後に展開する文明史、人間の精神史を面白く、分かりやすく説く。

近代以降、電気・電波による通信や映像技術の著しい進展は、メディアに拡大と変容を迫る。その先にあるのが我々の現代とコンピューター社会である。多様な歪みを抱えてしまった今日のメディアであるが、本書はその未来と可能性を樂觀的に見つけている。

東京農業大学出版会

おすすめ書籍紹介

▼『名園の見どころ』

河原武敏著(一七四八円)
日本庭園一六〇を解説したもの。名園の場所や、園内の平面図を掲載しており名園鑑賞する方は、是非一冊携帯を。

▼『モンゴル一〇〇の素顔—もう一つのガイドブッカー』(一五〇〇円)
一般の旅行案内では得られない、モンゴルの情報を提供する目的で編纂されたもの。写真を中心に、文章も平易にまとめられている。モンゴル旅行の際には、心強い味方となると思います。

▼『野菜栽培あれこれ』
米安 晟著(一四五七円)
50年間の野菜作りの実践と研究から、まとめたもの。著者の経験談を交えた読み易い文体系で、内容も豊富。野菜作りや家庭菜園を行っている方には、参考になることが盛りだくさんです。

▼『盆栽技術入門』
植松 敬著(一七四八円)
盆栽を始める人のための入門書。樹形の基本から、用具、樹木の選び方など、ていねいに解説されている。

法政大学出版局

▼テオドール・W・アドルノ著
龍村あや子訳／叢書・ユニベルシタス 628

『マーラー—音楽観相学—』二八〇〇円
|| 讀賣新聞評(三月一日)より抄録 ||

マーラーの魅力にめざめたのは四十五年も昔のことである。しかしその頃国内版のLPは実に少なかった。……今初めてマーラーを買いに行く人は、あまりにも大量のCDを前にして、どれを選んだらよいか、案内がなければ大いに迷うに違いない。それほどマーラーの人気は上昇し、彼の音楽は一般化している。

マーラー復興の機運を高めた画期的な著作が、四十年前に出たこの本である。……著者は二十世紀思想界の巨人だが、マーラーの音楽の徹底的な分析と、著者自身の思想の展開とが、ここで一つに重ねられている。

……マーラーの音楽を、著者はくり返しカフカになぞらえる。音楽に限らず、カフカなど広く二十世紀芸術の問題を追究した重い試みとして、この本は読まれる意味がある。……入念な注解を添えた苦心の労作というべき新訳の出現を喜びたい。評者・川村二郎氏(文芸評論家)

放送大学教育振興会

▼平成十一年度の新刊図書は七十一冊。放送大学の十一年度開設科目三百八に含まれ、履修登録をした学生たちの手許に三月末日までに届けられた。

▼新刊図書の履修科目登録者数のトップテンは、①『地球環境を考える』②『臨床心理学概説』③『こころの健康科学』④『日本の自然』⑤『医療・社会・倫理』⑥『発掘された古代日本』⑦『宗教への招待』⑧『高齢者福祉』⑨『人間の生物学』⑩『ジェンダーの社会学』

▼放送大学の開設科目は「生活と福祉」専攻（生活科学、健康科学、福祉関係）、「発達と教育」専攻（教育学、心理学）に特性があり充実している。卒業をめざす学生（全科履修生）の約半数はこの二専攻に属していて、関連図書の需要もかなり多い。前記①③⑤⑧『発がんとその予防』『高齢社会の生活設計』『食物の特性とその役割』『心理学入門』『カウンセリング』『生徒指導』②『老年期の心理と病理』などがそれである。

▼引き続き平成十二年刊行予定の図書七十七点、二百名以上となる執筆陣は、取材、執筆、校正にと、おお忙しである。

明星大学出版部

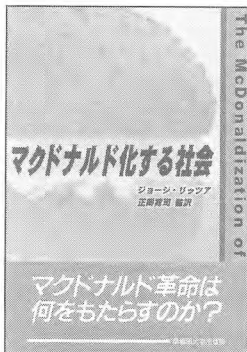
▼塚田紘一著『児童心理学』（仮題）近世に至るまで、子どもは「大人の小さい者」と考えられていた。しかしながら、ルソー（Rousseau, J.J.）の子どもを中心にした児童観によって児童は研究対象になる。ルソーは「エミール」の中で「子どもは大人と違ったもの」であり、不完全な大人としてではなく、子どもとして理解されなければならない存在である」と提言した。大人はかつて子どもだったために子どもの心をあたかも知り尽くしていると誤解していた。その誤解を解き、児童の心理が科学的に研究され始めたのは、わずか百余年前に過ぎない。それから児童心理学は日進月歩に発達する。本書では児童の心理の最新情報を解説。（目次「抜粋」）第一章 発達の基礎的理解 第二章 児童研究の方法、第三章 発達初期の展開、第四章 身体と運動機能、第五章 認知、第六章 知能と創造性、第七章 情緒・動機づけ、第八章 遊び、第九章 社会性、第十章 パーソナリティ。「児童心理学」を学ぶ者や、初等教育の教育者を指す者の必携の書。

早稲田大学出版部

▼（シリーズ高齢社会とエイジング）（全8巻）が完結した。最終回配本⑥『エイジングの心理学』（東清和編・二六〇〇円）は老いの仕組みを心理学的に解説し、高齢者などへの生きたい、望ましい家族関係などを考える。国際高齢者年に合せたシリーズの完結。この機にセットでのご購読をお薦めする。

▼『比較福祉論』（久塚純一・三〇〇〇円）社会福祉や社会保障の国際比較は可能か。データにとられない斬新な方法を展開して、福祉の意味を問い直す。

▼『マクドナルド化する社会』（G・リッツァ／正岡寛司監訳・三五〇〇円）マクドナルド方式の画一化を、なぜ人びとは受け入れるのか。世界一二か国で翻訳出版された話題の書。第二刷出来。



名古屋大学出版会

▼アントニー・D・スミス／巣山靖司・高城和義他訳『ネイションとエスニシティ——歴史社会学的考察——』（四二一〇〇円）
近代的なネイションの底にあるものは何か？——エスニックな要素の持続性を明らかにし、ナショナルリズム研究に新生面を切り拓いた名著。

▼ステイヴン・オーゲル／岩崎宗治・橋本恵訳『性を装う—ジェイクスピア・異性装・ジェンダー—』（二六八〇〇円）
近代初期英国の演劇と社会におけるジェンダー構築と主体形成の揺らぎを、性のパフォーマンスの視点から探究。

▼服部祥子・山田富美雄編『阪神・淡路大震災と子どもの心身—災害・トラウマ・ストレス—』（四五〇〇〇円）
震災が子どもへの心の奥底に残したものは何か。精神医学・心理学・看護学の専門家が独自の調査資料から多角的に分析。

▼重松伸司著『国際移動の歴史社会学—近代タミル移民研究—』（二八五〇〇円）
エトノス移民論の視角から、マレー半島に移住したインド移民の移動・定着過程と、その社会・文化構造を、現地調査と文献資料の両面から照射した力作。

京都大学学術出版会

▼「生態学ライブラリー」刊行開始！
四六判・各巻二一〇〇円／個体認識など、欧米にはない独自の方法を編みだし、世界の学界の中でユニークな一角を形作っているわが国の生態学の最前線を、三〇～四〇歳代を中心にいた気鋭の研究者が、豊富な図版も交えて分かりやすく披露する。霊長類学から、数理生態学等の理論分野まで、現代生態学の各分野をほぼ網羅し、登場する生物もダニからチンパンジーまでと幅広い。「理科離れ」をくいとめると同時に、〈多様性〉を認め〈共存〉を図る新しい時代の価値観を支える知のバックボーンを育てる。第一回配本の『カワムツの夏』『サルのことば』以下、シリーズ全二四巻を三～四年で刊行する。
▼『インドネシアの地場産業』水野廣祐著・五〇四九円／かつて欧米の学者によって「貧困の共有」と評されたインドネシア農村に広がる小営業の群。しかし、共同体に支えられた雑多な職業が、大工業では満たせない需要に応えるこの産業構造の中にこそ、アジア経済復興の可能性がある。緻密なフィールドワークで既存の開発経済論に再考を促す意欲作。

大阪経済法科大学出版部

▼竹岡勝美著『戦なきは武人の本懐—私の防衛本論—』（四六判・二九二頁・三二〇〇円）
元防衛庁高官である著者の防衛問題を中心とした論評の集大成。焦点の日米新ガイドライン・周辺事態法案・北朝鮮問題・スパイ防止法・大東亜戦争肯定論等への評論も収録。防衛庁時代の苦惱。岡山県警時代の話。冷戦終結後のヨーロッパでの軍縮の進展報告。国防の第一義が国民の生命を守ることにありとする著者の防衛『本』論が、冷戦終結後の新たな平和戦略の指針の一助となることを願っての、出版部異色の刊行。

▼岩崎允胤編著『哲学的価値論—日本・中国・旧ソ連での論究—』（A5判・二〇〇頁・四二〇〇円）
九七年に開催された日中価値論シンポジウムでの報告論文を中心に、日本・中国・旧ソ連での哲学的価値論の到達点を明らかにする。

▼呉満・安秉坤編著『標準韓国語文法の総合解説』（A5判・二八〇頁・二五〇〇円）
ハンゲル・朝鮮史研究の在日韓国人（呉）と日本語研究の韓国人（安）の二人の研究者の協力による韓国語文法の総合解説書。巻末に古典文法も収録。

大阪大学出版会

大学改革の進行は本作りにも反映してきた。ひとつは専門基礎教育の再編・統合の過程から、もうひとつは国際化に向けての学術基盤の整備から生まれた。

▼大阪地球総合工学入門編集委員会 編『地球総合工学入門―地球と調和する生活空間をめざして―』B5・三五〇〇円

これまでの地球環境論とひと味違って、いるところは、土木・建築・船舶・環境工学などの生活空間の建設系工学者が、危機に瀕する地球と人間を救うためには何をなすべきかを積極的に主張している点にある。地球を知り私たちの生活空間を創造してゆくための、工学部学生のための環境科学教科書、市民向け入門書。

▼日本化学会編／大木道則・内田 章訳『有機化学変換のIUPAC命名法―その名称および記号・線形表示―』B5・四〇〇〇円 IUPAC国際純正応用化学連合で定義された術語・記号・表示法の完訳。すでに流布している化合物命名法の姉妹書として、有機化学のみならず高分子化学・生化学・薬学・医学・錯体化学など広い分野の研究者・技術者・院生・学生の座右必携の書。

関西大学出版部

▼関西大学博物館『博物館資料図録』(二五〇〇〇円) 関西大学博物館が収蔵する考古学資料には帛状耳飾や石枕、縄文土器などの重要文化財が含まれている。本書は、同館が所蔵する縄文時代や古墳時代の主だった国内資料と、中国や朝鮮半島、ヨーロッパなどの外国資料をカラー写真で収録するとともに、専門研究者による解説・論考も付ける。▼浦西和彦解題『葦分船』(二二〇〇〇円) 本書は、明治二十四年七月に山田芝麴園が尾崎紅葉補助と銘打って創刊したものの影印本。芝麴園の軽佻浮薄なたわいもない雑文に森鷗外が痼癩を起こし、「文壇の花合戦」論争として注目されたことでも有名。徳田秋声や丸岡九華らが寄稿し、河井醉茗が「気の利いた編輯振りを見せた文芸雑誌」と評した明治文学研究における貴重な資料。▼山村嘉己著『詩人と女性』(二九〇〇円) 本書は、ボードレール、ヴェルレーヌ、ランボー、マラルメの四人について、それぞれの女性との関わりを追究し、その作品への現われ方を研究したものだ。新しいフェミニズムの観点も入っている。

九州大学出版会

▼納富信留・溝口孝司編『空間へのパスケクティヴ』(A5判・三二八頁・三四〇〇円) 「空間」というテーマをめぐる、哲学、地理学、考古学、文化研究、政治学、法学、経済学による考察。私たちの生活や文化・社会の在り方、更には「近代」や知の枠組みを見直し多角的な視座を提示する、九州大学「空間」プロジェクト。▼T・J・ミセリ／細江守紀監訳『法の経済学』(A5判・三四頁・三四〇〇円) 不法行為法、契約法、財産法等の伝統的コモン・ローのトピックスを、マイクロ経済学的手法により分析するとともに、訴訟と和解決定に関する諸問題を検討する。▼武内忠男・衛藤光明『The Pathology of Minamata Disease』(B5判・三〇八頁・一三〇〇〇円) 世界的にみても未曾有の環境汚染による集団中毒である水俣病に関する病理学的知見を提供する初の英文モノグラフ。日本生命財団出版助成図書。▼諸宗教の倫理学⑤『環境の倫理』(四六判・二七六頁・二五〇〇円)。既刊④『性の倫理』、③『健康の倫理』。続刊②『労働の倫理』、①『所有と貧困の倫理』。

東北大学出版会

▼浦井昭・山内英生・大内清明監修

『Carcinoma of the Pancreas and Biliary Tract: Recent Underlying Problems』B5判変型・上製・五五二頁・五〇〇〇円

東北藤・胆道癌研究会のメンバーによって纏められた英文モノグラフ。臨床医を対象として診断と治療上の問題点を明らかにし、関連子学から症例報告まで藤・胆道癌に関する幅広い内容となっている。

▼田中英道著『ミケランジェロの世界像―システイナ礼拝堂天井画の研究』A5判・三八四頁・三二〇〇円

システイナ礼拝堂の天井に描かれたミケランジェロの宗教画に関する研究成果の集大成。天井画の製作順に7章から成り立ち、第一章では天井画全体の画像プログラムを初めて体系的に分析した。

▼材料電磁プロセッシング研究グループ編『材料電磁プロセッシング』A5判・一五五頁・二〇〇〇円

溶けた金属が浮く。驚異的な電磁場の力。材料電磁プロセッシングとは。わかりやすい基礎から最先端の実用例まで材料プロセス工学分野の待望の書。

流通経済大学出版会

▼『産業立地の経済学』(F・マッカーン著・坂下昇訳、予価四〇〇〇円)

本書は、われわれが企業の立地問題を理論的および実証的観点の双方において如何に再構築すべきかということの試みである。企業の立地理論を再構築することの動機づけは、企業間連繋の組織における最近の変化の空間的効果を扱うという問題から生じている。その変化とは伝統的な西欧流の購入および配達技術より離れて、進んでジャスト・イン・タイム(JIT)原理を採用するということである。JITの基本的原理は、一企業によって生産される産出生産物の品質は企業間連繋を含む生産連鎖のどの点においても在庫の保有量を可能な限り少なくすることによって最大化されるというものである。

旧来の企業間購入連繋からJIT調達法を包含するそれへの変化の効果を理論的に論ずる場合、現存の新古典派的立地理論では適切かつ不適當であり、その理論は根本的に再モデル化される必要があるということである。

三重大学出版会

▼三重学術出版会は三重大学出版会の前身であり、以下のような出版物がある。

▼『希望と苦悩のアジア』(三重大学国連協力推進委員会編、一九五〇円) 二二名のエッセイ集。アジア・環境・地域社会をコンセプトに行われた共同研究の「もう一つの報告書」である。

▼『日振島の昭和史』(田中皓正著、七八〇〇円) 平安時代、藤原純友の反乱で舞台となった孤島の昭和史。人災・天災を克服してきた日振島に関し、多くの資料を集めて着実に再構成している。

▼『政府の経済活動と市場機構』(焼田党著、四六〇〇円) 計量経済学の世代重複モデルを用いた気鋭の論集。公共支出・税・インフレーションの関係が新たな視点から分析されている。

▼『二十一世紀の授業づくり』(山根栄次編、一七〇〇円) 問題解決型学習による社会科・生活科・総合学習における授業のビジョン、考える力を育てる指導のポイントを解説。

新刊案内 '99・4 S '99・6

■北海道大学図書刊行会

ティームール朝成立史の研究
金融の原理〔増補第2版〕

情報・秩序・ネットワーク
市民的秩序のゆくえ

日本北辺の探検と地図の歴史
男装の科学者たち―ヒュパティアからマリー・キュリーへ―

M・アリック／上平初穂・上平恒・荒川泓訳 二四〇〇円
トヨタの米国工場経営―チーム文化とアメリカ人―
T・L・ベッサ―鈴木良始訳 三二〇〇円

統計と統計理論の社会的形成

長屋政勝・金子治平・上藤一郎編著 三八〇〇円
原色日本トンボ幼虫・成虫大図鑑 杉村光俊・石田昇三・
小島圭三・石田勝義・青木典司 六〇〇〇円

■聖学院大学出版会

パウル・ティリッヒ研究 組織神学研究所編 三八〇〇円
近代世界とキリスト教 W・パネンベルク／深井智朗訳 二〇〇〇円

■麗澤大学出版会

インターネットで学ぶ―アメリカ政治の基礎知識―
ロナルド・A・モース／見付宗弥 二五〇〇円

現代中国の群像―歴史はこうして創られる―大貫啓行 一八〇〇円
鈴木正三―日本型勤勉思想の源流― 堀出 一郎 四〇〇円

〈ユネスコ・国連大学シンポジウム〉ユネスコ五〇周年記念出版
科学と文化の対話―知の収斂― 服部英二監修 四五〇〇円
宇宙は生きている ジョン・グリビン／立木教夫訳 予三五〇〇円

■慶應義塾大学出版会

KEIO SFC REVIEW No. 4 慶應義塾大学湘南藤沢学会編 一四二九円
原敬と立憲政友会 玉井 清 五〇〇〇円
アートとコンピュータ―新しい美術の射程― 藤幡 正樹 二八〇〇円

The Rise of the Feminist Movement in Japan 藤幡 正樹 二八〇〇円
二一世紀国際政治の展望 徳座 晃子 三〇〇〇円

現代アジア 危機からの再生 添谷芳秀編 二五〇〇円
ゼミナール 地球環境論 国分良成編 二五〇〇円

慶應義塾大学経済学部環境プロジェクト編 三二〇〇円
EUの法的課題 石川明・櫻井雅夫編 四〇〇〇円

福澤諭吉論の百年 西川俊作・松崎欣一編 二二〇〇円
フィールド・リサーチ―現地調査と調査者の戦略― 川合隆男監訳 二六〇〇円

若林真 個人訳 アンドレ・ジッド代表作選 (セット価格) 二五〇〇円

現代中国の政治―その理論と実践― 小島 朋之 四〇〇〇円

主要国政治システム概論 中村勝範編 二〇〇〇円

■産能大学出版部

- セールスレターで「住宅」が売れる本 三島 俊介 二〇〇〇円
 自動車大ビッグバン 安田有三/山下雄聖郎共著 一五〇〇円
 日本の中の世界一企業 石川昭/根城泰共著 一六〇〇円
 デジタル感性 谷口 正和 一六〇〇円
 偉人を育てた親たち 松枝 史明 一五〇〇円
 MBA経営キーコンセプト 鶴岡公幸/松林博文共著 一八〇〇円
 私の大学改革 野田 一夫 一五〇〇円
 全国安心工務店〈東日本版〉 三島 俊介 二〇〇〇円

■専修大学出版局
 帝人事件 別巻二

専修大学今村法律研究室編 四一七五円

■玉川大学出版部

- 国際社会の動向と日本―情報・通信のグローバル化― 日比野正明編著 二四〇〇円
 自立する力を育てる教育 鈴木由美子 二二〇〇円
 学校経営の改革戦略―日米の比較経営文化論― 中留 武昭 七〇〇〇円
 生と性の教育学 三井善止編著 二二〇〇円
 宗教多元主義への道―メタファーとして読む神の受肉― J・ヒック/間瀬啓允・本多峰子訳 四四〇〇円
 ユニバーサル化への道―高等教育研究第2集― 日本高等教育学会編 三六〇〇円
 マルチメディアと教育 加藤 潤 二六〇〇円
 おもしろい授業のプラン―玉川学園小学部総合科の実践― 玉川学園小学部編 二〇〇〇円

■中央大学出版部

- わが国の管理会計―実態調査研究― 佐藤進編著 三九〇〇円
 金融システムの構造変化と日本経済 花輪俊哉編著 四一〇〇円

刑事政策の諸問題

藤本 哲也 四四〇〇円

- 近代ヨーロッパ芸術思潮 中央大学人文科学研究部編 三八〇〇円
 民国前期中国と東アジアの変動 中央大学人文科学研究部編 六六〇〇円
 戦後日本資本主義―展開課程と現況― 中央大学経済研究所編 四五〇〇円
 近代中国における政党・社会・国家―中国国民党の形成過程― 深町 英夫 三六〇〇円
 法律家をめざす諸君へ「一九九九年度版」 中央大学法職講座運営委員会編 一五〇〇円

■東海大学出版会

- 人とサルの社会史 三戸幸久・渡邊邦夫 三二〇〇円
 海洋実習ハンドブック 東海大学海洋学部編 二〇〇〇円
 セメスターのための基礎電磁気学 白石 正ほか 二八〇〇円
 王子ノ台遺跡―第II巻 歴史時代編― 東海大学校地内遺跡調査団編 八〇〇〇円
 トドの回遊生態と保全 大泰司紀之・和田一雄編著 一〇〇〇円
 基礎から学ぶ法の見方・考え方 立山 龍彦 二五〇〇円
 地球科学に革命を起こした船―グロマー・チャレンジャー号― ケネス・J・シュー/高柳洋吉訳 五〇〇〇円

■東京大学出版会

- 東京大学公開講座68 車「くるま」 二六〇〇円
 インド古典詩論研究 ―アーナンダヴァルダナのDhvanī理論―上村勝彦 二八〇〇円
 先進諸国の社会保障3 カナダ 城戸喜子・塩野谷祐一編 五二〇〇円
 先進諸国の社会保障4 ドイツ 古瀬 徹・塩野谷祐一編 五二〇〇円
 講座社会学8 社会情報 児島和人編 三〇〇〇円

契約法から消費者法へ〈生活民法研究Ⅰ〉
一般気象学〔第2版〕
古地磁気学

大村 敦志 五八〇〇円
小倉 義光 二八〇〇円
小玉 一人 四五〇〇円

昭和篇111
国立国会図書館所蔵 一四〇〇〇円

帝国議会衆議院委員会速記録 昭和篇147
倭国の出現—東アジア世界のなかの日本—西嶋 定生 五八〇〇円
丸山眞男講義録 第二冊 日本政治思想史一九四九 丸山 眞男 三二〇〇円

多文化主義のアメリカー揺らぐナショナル・アイデンティティ—
油井大三郎・遠藤泰生編 三八〇〇円
消費者・家族と法〈生活民法研究Ⅱ〉 大村 敦志 五八〇〇円
法とフィクション 来栖 三郎 五八〇〇円

日本資本主義史論 大石嘉一郎 五八〇〇円
植物の進化形態学 加藤 雅啓 四〇〇〇円
井上毅伝外篇 近代日本法制史料集 第二十 諸氏雜纂1 五〇〇〇円

昭和篇112
国立国会図書館所蔵 一四〇〇〇円

帝国議会衆議院委員会速記録 昭和篇148
国立国会図書館所蔵 一八〇〇〇円

建築を語る 安藤 忠雄 二八〇〇円
近代日本金融史序説 石井 寛治 八〇〇〇円
近世の芸能興行と地域社会 神田 由築 八五〇〇円
明治国家と宗教 山口 輝臣 六〇〇〇円
戦時日本農村社会の研究 森 武鷹 六二〇〇円

戦間期中国〔自立への模索〕
—関税通貨政策と経済発展—
久保 亨 五四〇〇円
講座社会学5 産業 北川隆吉編 二八〇〇円
財政調整の一般理論 金井 利之 六四〇〇円

分配の経済学 石川 経夫 四八〇〇円
新しい自然史博物館 糸魚川淳二 三八〇〇円
岩盤力学 西松 裕一 五二〇〇円

The Himalayan Plants, vol. 3 大場秀章編 二四〇〇〇円
昭和篇113
国立国会図書館所蔵 一四〇〇〇円

帝国議会衆議院委員会速記録 昭和篇149
国立国会図書館所蔵 一八〇〇〇円

■東京電機大学出版局
WWWにおけるXMLの活用 日本ユニシス情報技術研究会編 三〇〇〇円
ビギナーズ物理—理工系を学びはじめる人のために— 荻原 宏康 二二〇〇円

パソコン力養成ゼミ—ゼロからわかる基本用語150— 東京電機大学パソコン力向上委員会編著 一五〇〇円
インターネットのためのArobat/PDF
インターネットのためのArobat/PDF トーマス・マーツ著／広田健一郎訳 三五〇〇円

メディアの技術史—洞窟画からインターネットへ— 齋藤 嘉博 二二〇〇円
Mathematica 3による工科の数学 田澤 義彦 二五〇〇円
サッカーコンディショニングの科学 浦上千晶他 一六〇〇円
論理学へ人文・社会科学セミナー 森田 茂行 二一〇〇円

■東京農業大学出版会
'99完全版入試問題集 一七〇五円

■法政大学出版局
聖なる伝承をめぐって 井本 英一 二九〇〇円
ベルクソン講義録I—心理学講義／形而上学講義—
H・ベルクソン／合田正人・谷口博史訳 七六〇〇円

アーレント「マッカーシー」往復書簡

眺のフクロウー続 C・プライトマン編/佐藤佐智子訳 六六〇〇円

A・カトロッフエロ/寿福真美訳 三八〇〇円

食べられる言葉 L・マラン/梶野吉郎訳 三二〇〇円

近代の形而上学 H・ハイムゼート/北岡武司訳 五二〇〇円

崇高とは何か M・ドゥギー他/梅木達郎訳 四六〇〇円

唯物論シェイクスピア I・カンプス編/F・ジェイムソン他/川口喬一訳 四〇〇〇円

精神分析の方法 Iーセブン・サーヴァンツ W・R・ピオン/福本修訳 三五〇〇円

野蚕録 王元純/伊藤智夫・深田哲夫訳 三八〇〇円

見えないものを見るーカンデインスキー論 M・アンリ/青木研二訳 二八〇〇円

眼の戯れー伝記 一九三二ー三七 E・カネッティ/岩田行一訳 四二〇〇円

悪 あるいは自由のドラマ R・ザフランスキー/山本尤訳 三五〇〇円

ハイデガーの真理論 岡田 紀子 五七〇〇円

放送大学教育振興会 高橋元夫・高鷲忠美・増田信一 二六〇〇円

図書館資料利用論Ⅲ

明星大学出版部

早稲田大学出版部

比較福祉論 久塚 純一 三〇〇〇円

マクドナルド化する社会 G・リッツァ/正岡寛司監訳 三五〇〇円

企業組織の経営学 井上正・手塚公登 三〇〇〇円

フランスの行政「新装版」 下條美智彦 二九〇〇円

フランス演劇史概説「新装版」

岩瀬孝・佐藤実枝・伊藤洋 三五〇〇円

世界の行政改革へ日本比較政治学会年報創刊号 日本比較政治学会編 三〇〇〇円

シリーズ高齢社会とエイジング(全8巻)最終回配本/第6巻 東 清和編 二六〇〇円

エイジングの心理学 シリーズ比較家族第Ⅱ期第3巻 東 清和編 二六〇〇円

シリーズ比較家族第Ⅱ期第3巻 名前と社会ー名づけの家族史ー 上野和男・森謙二編 三八〇〇円

早稲田大学理工総研シリーズ第13・14巻 尾島俊雄監修 二〇〇〇円

完全にサイクル型住宅「木造編」 尾島俊雄監修 二〇〇〇円

DSNの時代ー持続可能なエネルギー供給を目指してー 尾島俊雄・田中俊彦 二〇〇〇円

政治思想研究叢書第9巻 近代イギリス政治思想史研究ー 佐藤正志・添谷育志編 四〇〇〇円

政治概念のコンテクストー

名古屋大学出版会

新版「臨床医学概論」放射線診療学を学ぶ人のためにー 玉木正男・林文子・林邦昭 三八〇〇円

ネイションとエスニステイー歴史社会学的考察ー 四二〇〇円

アントニー・D・スミス/単山靖司・高城和義他訳

性を装うーシェイクスピア・異性装・ジェンダーー 三六〇〇円

ステイヴン・オーゲル/岩崎宗治・橋本恵訳

阪神・淡路大震災と子どもの心身ー災害・トラウマ・ストレスー 四五〇〇円

服部祥子・山田富美雄編

国際移動の歴史社会学ー近代タミル移民研究ー 重松 伸司 六五〇〇円

西洋近現代史研究入門「増補改訂版」 望田幸男他編 三二〇〇円

重松 伸司

重松 伸司

重松 伸司

重松 伸司

重松 伸司

重松 伸司

重松 伸司

重松 伸司

重松 伸司

重松 伸司

重松 伸司

■京都大学学術出版会

カワムツの夏―ある雑魚の生態―

片野 修 二二〇〇円

〈生態学ライブラリー 1〉
サルのことば―比較行動学からみた言語の進化―

小田 亮 二二〇〇円

〈生態学ライブラリー 2〉
ミクロの社会生態学―ダニから動物社会を考える―

齋藤 裕 二二〇〇円

〈生態学ライブラリー 3〉
食べる速さの生態学―サルたちの採食戦略―

中川 尚史 二二〇〇円

〈生態学ライブラリー 4〉
インドネシアの地場産業―アジア経済再生の道とは?―

水野 廣祐 五〇四九円

確率概論

河野 敬雄 二二〇〇円

アルケ―99―関西哲学会年報7―

関西哲学会編 一五〇〇円

■大阪経済法科大学出版部

戦なきは武人の本懐―私の防衛本論―
哲学的価値論―日本・中国・旧ソ連での論究―

竹岡勝美著 三二〇〇円

標準 韓国語文法の総合解説

岩崎允胤編著 四二〇〇円

■大阪大学出版会

地球総合工学入門―地球と調和する生活空間をめざして―

呉 満・安秉坤編著 二五〇〇円

大阪大学地球総合工学入門編集委員会編 三五〇〇円

有機化学変換のIUPAC命名法―その名称および記号・線形表示

日本化学会編/大木道則・内田 章訳 四〇〇〇円

■関西大学出版部

博物館学概説

博物館資料図録

葦分船

網干善教編 二二〇〇円

関西大学博物館 二五〇〇円

詩人と女性―フランス印象主義の裏側― 山村 嘉己 二九〇〇円

浦西和彦解題 二三〇〇円

■九州大学出版会

The Pathology of Minamata Disease

武内忠男・衛藤光明 一三〇〇〇円

諸宗教の倫理学5 環境の倫理 M・クレッカー&U・トゥ

ヴォルシュカ編/石橋孝明・榎津重喜・山口意友訳 二五〇〇円

法の経済学―不法行為、契約、財産、訴訟―

T・J・ミゼリ/細江守紀監訳 三四〇〇円

空間へのパスペクティヴ

納富信留・溝口孝司編 三四〇〇円

ミクロ・エコノミックス

是枝正啓・福澤勝彦・村田省三 三〇〇〇円

スコットランド啓蒙研究―経済学的考察―小柳 公洋 四五〇〇円

社会と生活文化の展望―九州産業大学公開講座15― 二〇〇〇円

二十一世紀に向かつての変革―久留米大学公開講座14― 二〇〇〇円

台湾の原住民と国家公園 陳 元陽 三四〇〇円

地域主義と国際秩序 L・フォーセット&A・ハレル編

菅 英輝・栗栖薫子監訳 三八〇〇円

■東北大学出版会

西海捕鯨の史的研究

鳥巢 京一 八五〇〇円

■流通経済大学出版会

三重大学出版会

阿閉義一著 二〇〇〇円

高等物理学教程(量子力学篇)

阿閉義一著 二〇〇〇円

▼あいつも変わらずブランドもののバッグがはやっている。値段が高いだけあって、縫製や材質には「さすが」と思わせられるのだが、デザイナーのイニシアルやメーカーのロゴを臆面もなく地紋にあしらったデザインには抵抗がある。BOSSやMALT'sのブルゾンやスタジャンの方が、宣伝の意図がはつきりしているだけに、むしろカッコイイ。

▼とはいえ一流のデザイナーの手になる商品であれば、どこかに名前が記されているのは常識だ。ドレスならば襟の裏に、スーツならば胸ポケットの裏あたり、Hanae MORIMORIとか、KANTO Yamamoto などのラベルが縫いつけてある。

▼例外はある。印刷書体（フォント）がそうだ。書物の奥付を見てほしい。著訳者・编者、発行者・発行者、印刷所・製本所に加えて、装幀者や用紙までが記されていることはあっても、使用した書体についての記述は滅多にない。たまにあっても、その書体のデザイナーの名前が記されていることはない。

▼場合によっては装幀やレイアウト、組版の巧拙よりも、使用したフォントが書物の第一印象を決めてしまうことがあるにもかかわらず、それが現実だ。

▼活版からCTSやDTPへの移行に際して、出版界ではさまざまな抵抗があった。その抵抗の多くは、よくいわれる問題、たとえば活版と平版の印刷面の、凹凸のあるなしの違いなどより

●製作の現場から 20
鈴木さんちの
つとむ君

も、新しいシステムが使用するフォントへの違和感に起因していたのではないかと、僕はひそかに思っている（石井明朝とモリサワ細目の責任は大きい）。

▼デザイナーの名前が表に出ることが少ないから、読者はもちろん、著者も編集者も、デザイナーの個人名を意識することは少ない。石井明朝やアドビの小塚明朝など、制作者の名前を冠した

フォントは例外的な存在といえよう。僕自身、これまで書体と制作者が結びつくのは、タイポスの桑山氏ぐらいなものだった。

▼ここに一冊の本がある。鈴木本制作委員会編「鈴木勉の本」（字游工房刊・非売品）、A5判・上製糸綴・布装・二八〇頁、厚手だがしつとりした手触りの本文用紙を使い、平野甲賀氏が装幀した立派な本だ。フォントデザイナー鈴木勉氏の作品の成り立ちを第一部に、さまざまな人たちによる追悼文が第二部に配され、第三部には鈴木氏が代表取締役を務めた字游工房十年の歩みが続けられている。

▼一読して驚いた。僕がカバーやオビに多用してきたスーシャや鈴木氏のデザインだった。写研のシステムを使用するかぎり二者択一に近いとはいえ、石井明朝が嫌いなため本文に一貫して使用してきた本蘭明朝は、仮名は橋本和夫氏だが、漢字は鈴木氏を含むチームによってデザインされ、そのファミリー化にも鈴木氏が関わっている。広告に多用してきたゴナは中村征宏

氏のデザインだが、ファミリー化のまとめ役は鈴木氏だった。さらに最近では、一度使ったいたいと思っているヒラギノ明朝制作チームのまとめ役でもあったという。ヒラギノは、実質的には鈴木氏のデザインと言っているのだから、商品化した大日本スクリーン製造でも「鈴木勉デザイン」として売り出したかったらしい。にもかかわらず、鈴木氏はそれを頑なに拒否したという。アパレル関係の出しやばりデザイナーとは大違いだ。

▼もちろん僕は、鈴木氏と一面識もない。しかし、この本を読んでいるうちに、何だか幼なじみのような気がしてきた。鈴木氏を知らなくとも、氏が生み出してきたフォントとは、もう長いつきあいになる。失礼を承知で書かせて貰おう、「鈴木さんちのつとむ君」、ご冥福を祈ります。

▼なお、このコラムには、平成明朝体W3を使用している。取引先のシステムとの関係、お金の問題等々で、必ずしも好きなフォントが使えらるわけではないのが辛いところだ！（不穩徒）

大学出版部協会加盟出版部一覽

北海道大学図書刊行会	〒060-0809 札幌市北区北9条西8丁目 北大構内 TEL. 011-747-2308 FAX. 011-736-8605
聖学院大学出版会	〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1-1 TEL. 048-725-9801 FAX. 048-725-0324
麗澤大学出版会	〒277-8686 千葉県柏市光ヶ丘2-1-1 TEL. 0471-73-3331 FAX. 0471-73-3154
慶應義塾大学出版会	〒108-8346 東京都港区三田2-19-30 TEL. 03-3451-6926 FAX. 03-3454-7029
産能大学出版部	〒152-0035 東京都目黒区自由が丘2-16-5 自由が丘昭信ビル TEL. 03-3724-9101 FAX. 03-5701-7499
専修大学出版局	〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-8-3 専修大学4号館 TEL. 03-3263-4230 FAX. 03-3263-4288
玉川大学出版部	〒194-8610 東京都町田市玉川学園6-1-1 TEL. 042-739-8935 FAX. 042-739-8940
中央大学出版部	〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1 TEL. 0426-74-2351 FAX. 0426-74-2354
東海大学出版会	〒151-8677 東京都渋谷区富ヶ谷2-28-4 TEL. 03-5478-0891 FAX. 03-5478-0870
東京大学出版会	〒113-8654 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学構内 TEL. 03-3811-8814 FAX. 03-3812-6958
東京電機大学出版局	〒101-8457 東京都千代田区神田錦町2-2 TEL. 03-5280-3433 FAX. 03-5280-3563
東京農業大学出版会	〒156-8502 東京都世田谷区桜丘1-1-1 TEL. 03-5477-2562 FAX. 03-5477-2643
法政大学出版局	〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-7 TEL. 03-5214-5540 FAX. 03-5214-5542
放送大学教育振興会	〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-14-1 郵政互助会琴平ビル3F TEL. 03-3502-2750 FAX. 03-3592-2482
明星大学出版部	〒191-8506 東京都日野市程久保2-1-1 TEL. 042-591-9979 FAX. 042-593-0192
早稲田大学出版部	〒169-0071 東京都新宿区戸塚町1-103 TEL. 03-3203-1551 FAX. 03-3207-0406
名古屋大学出版会	〒464-0814 名古屋市千種区不老町1 名古屋大学構内 TEL. 052-781-5027 FAX. 052-781-0697
京都大学学術出版会	〒606-8501 京都府京都市左京区吉田本町 京都大学構内 TEL. 075-761-6182 FAX. 075-761-6190
大阪経済法科大学出版部	〒581-8511 大阪府八尾市楽音寺6-10 TEL. 0729-41-8211 FAX. 0729-41-9979
大阪大学出版会	〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-1 大阪大学事務局内 TEL. 06-6877-1614 FAX. 06-6877-1614
関西大学出版部	〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 TEL. 06-6368-1121 FAX. 06-6389-5162
九州大学出版会	〒812-0053 福岡市東区箱崎7-1-146 九州大学構内 TEL. 092-641-0515 FAX. 092-641-0172
東北大学出版会(準会員)	〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1 東北大学構内 TEL. 022-214-2777 FAX. 022-225-2029
流通経済大学出版会(準会員)	〒301-8555 茨城県龍ヶ崎市平畑120 TEL. 0297-64-0001 FAX. 0297-64-0011
三重大学出版会(準会員)	〒514-8507 三重県津市上浜町1515 三重大学出版ホール内 TEL. 059-232-1356 FAX. 059-231-1356

大学出版(第42号)'99夏 平成11年7月10日発行 発行所/大学出版部協会

〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号 東大構内 東京大学出版会内 電話03-3812-2111 (内)7956

E-MAIL: mail@ajup-net.com URL: http://www.ajup-net.com/

頒布価格100円 千共